
トリコ～おいしい食材を求めて～

闘魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリコ〜おいしい食材を求めて〜

【Nコード】

N5199X

【作者名】

闘魂

【あらすじ】

気が付いたら知らない空間に居た。そこで神と出会い部下のミスで死んでしまったことを言われた主人公。お詫びにいくつかの能力をもらってトリコの世界に行く主人公。彼はその世界でどんなふう
に生きるのか。

作者は小説を書くのが初めてなので面白くなかったら見ないでください。

プロローグ

ここはどこだ？そう思って周りを見渡すと何も無い真っ白な空間にいた。

何で此処に居るんだ？と考えると、立派なひげを生やした爺さんがいた。

「お主は天道明《てんどうあきら》であつとるかの？」

『あつてるけど、誰やあんた？』

「わしか？わしは神じゃ」

『神様か俺になんか用事でもあるんか？』

「あつさり信じたのう。まあ疑われるよりいいがの。」

「それで話の内容じゃが、実はわしの部下が書類をダメにしてしまったんじゃが、ちょうどそのダメにした書類がお主の書類だったのじゃすまんかった！！」（土下座）

『その書類の内容は？』

まさか寿命に関する物か？

「その通りじゃコーヒー飲んでてこぼしてしまつたみたいなのじゃ。本当にすまんかった！」

『いやいや、神様の所為じゃないやろ。それに誰にだってミスはあるしな。』

「それでもすまんかった」

『もう気にしてへんよ。ただ心残りは親が心配なのと人生を面白おかしくすごしたかっただけやし。』

「親については心配なさるな幸せに暮らせるようにしておこう。」
ならよかった。

「人生うんぬんの方は転生してもらうかの。」

転生？転生って二次創作でマンガやゲームの世界に新しく生まれ変わって好き勝手したりするやつだろ？

「そのとうりじゃ」

あれ？俺、声だしてたっけ？

「いやだしてないの。神は心くらい読めるのじゃよ。」
ふん、まっいいか

「いいのの？まあいいかのそれでお主には行きたい世界と能力、後はまあ言ってくればわしのできる範囲でしてやるうかの。」

『じゃあ世界はトリコで、美味しいもの食いたいし面白そうやからな能力は、（不老不死で18歳くらいでなるようにしてほしい。それとグルメ細胞と、成長限界の壁をなくしてくれ、それと電気まあ雷やなと風を操る力、トリコ達に相棒がいたから俺もほしいな……：そーうや！遊戯王のスターダストドラゴンをカードじゃなくて本物をくれりりカルなのはのフリードみたいに小さくなれる様にしてくれ。後、異世界世界を渡る能力でお願いするわ。』

「あい分かった後は見た目と名前はとうする？」

見た目が悩むなうん……よし決めた。

『じゃあ容姿はリボーンの雲雀さんにしといてかっこいいし名前はあだ名で呼ばれてたからアキにする』

「分かったそれじゃあそろそろお別れじゃ困ったことがあれば頭の中で念じればはなせるからな。」

アキの体がだんだんすけて行く

『分かったそれじゃさよなら。』

「楽しく過ごすのじゃよ」

完全に消え去ったアキを見てそう思う神であった。

プロローグ（後書き）

アキのフルコースはオリジナルや原作の物をいれるつもりです。

設定（前書き）

トリコ達って何歳だろ？

設定

アキ

性別 男

年齢 転生後は0歳、原作開始時は肉体年齢は18歳。18歳になつてから数えるのをやめたため

身長 190cm

体重 80kg

容姿、リボーンの雲雀恭弥、体は史上最強の弟子ケンイチに出ていた全身ピンク色筋肉でできている。

服装、上、黒いロングコート、黒いTシャツ

ズボン、黒い長ズボン黄色のラインが所々はいつている。

手袋、革製で黒色指の穴が全部あいている手の甲の部分に右手は『雷』左手に『竜巻』のマークが入っている。（手袋はマークを入れているだけで左右のマーク関係なしに技が放てる）

能力、不老不死肉体年齢が18歳で止まる（細胞は進化し続ける）、グルメ細胞、限界突破、雷と風を操る力（イメージは幽々白書の朱雀と陣）世界を渡る力、文字通り異世界へ渡ることができる能力一度行つた世界へも戻れる。

相棒、遊戯王5D'sのスターダストドラゴン、アキが一生懸命に育てたので誰よりもアキになつている。グルメ界の絶滅種という設定。リリカルなのはフリードのように体を小さくできる（チビ龍モード）、捕獲レベルは測定不能。名前は「シルフ」

設定（後書き）

アキは捨て子でI.G.O.会長一龍に拾われて孫になると言いつとします。

第1話（前書き）

主人公が会話するときには『
』でそのほかの人は「
」で行きたい
とおもいます。

第1話

どうもアキです今めっちゃ困ってるねん。えっ？何で困ってるかって？それは…

「あなたさっさとこの化物を捨ててしまつて頂戴！！」

「ああこんなのがうちの子供だったと知られたら周りからひどい目にあつてしまつ。」

そう、ただいま親に捨てられそうになつてんねん。

『おぎゃあ！おぎゃああああ！！』（ちよつとまてや！何で赤ん坊の俺を捨てようとすんねん！！）

「泣き出したわあなた早く捨てて頂戴また電撃や突風に襲われたらたまりません！！」

「そうだなまた怪我をさせられたらたまらんからなつて……うわあああ何でこんなところに猛獣がああ」

「きやあああ食べられる助けてえー」

俺を捨てようとした時、近くに猛獣たちがいて俺の泣き声で呼んでしまったみたいや。そんでその猛獣たちは逃げ出した親たちを食つて俺のところに来た。

『おぎゃあ！おぎゃああああ！！』（誰か助けて！食わてまう！）

猛獣たちが俺を食おうとした時、誰かが猛獣たちを吹っ飛ばした。

「なんじゃ？猛獣どもが暴れてると聞いて来てみれば赤ん坊が捨てられて居るではないか！」

ちよつと若いがIGO会長の一龍がいた。

「大丈夫か？しかし、ひどいことするのうまったくこんな子供を捨てるなんて」

そう言っつて手を伸ばしてきたがパニックになっていた俺は泣き続けていた。

『おぎゃあ、おぎゃああぁ』　ビリビリビリ　ヒュンヒュンヒュン

「なるほどのうこの力が原因で捨てられたのか。大丈夫じゃわしはお前を見捨てはせん。」

そう言っつて電撃やカマイタチが出ているにもかかわらず俺の頭をなでてくれた。俺は安心して眠りについた。

「これからお前はわしの孫じゃ。名前はうづむ……アキと名付けよう。」

俺が寝るのを見て安心した会長は名前を付けて孫にしてくれた。

第2話

どうもアキっす。俺が会長一龍さんに拾われて10年くらい経ったんやけど。今は自分の力がどこまで通用するのか試すために爺ちゃん（そ）う呼ぶように言われた（と特訓中や。

『はああああ雷神拳！』

雷を纏まとわせた右ストレート

「ふむなかなかいいパンチだぞ」と言っ一龍さんて軽く受け止める爺ちゃん

『嘘つけ！全然効いてないやんけ！これならどうや風神脚！』
足に竜巻を纏まとって相手目掛けて竜巻を飛ばす

「威力はあるがまだまだ遅いな。」あっさり避けられる。

『まだや！落雷らくらい踵落かかとおとしとし！！』
足に雷を集めて雷が落ちるかのように足を振り下ろす

「今のは良かったぞ。」受け止められる。

『これで最後や！修羅しゆら……強くなったのうアキ』電撃でんげき旋風せんぷう拳けん！！』

拳に雷と風の力を混ぜて作った雷の竜巻を極限まで圧縮し纏まとわせて貫通力を挙げた一撃必殺の技なのだが

ピタァ

と受け止められた

「ご褒美に水面の走り方を教えてやるう」ニコ

ドン』!？」顔を殴られて水面をはねながら吹っ飛ぶ。

「どっじゃ水の上を飛び跳ねた気分は」

『痛ててくそーやっぱ強いな爺ちゃんは』

「いやいや…だいぶ強くなったのうアキ。わしはうれしいぞい」

『爺ちゃん、俺の実力はどこまで通用する?』

「ふむ実力や技は「グルメ界」に通用するかもしれん」

『ほんまか!?』

「が」

『?』

「「グルメ界」は猛獣以外にも特殊な気候や気象そこに対応できなければ「グルメ界」では到底生きていけぬ。」

『ならその特殊な環境に適應するようになって爺ちゃんに追いついたる』

「楽しみにしてるよ。それより何か鳴き声が聞こえんか?」

『鳴き声?……ホントだ確かに聞こえるあっちの方や』と鳴き声のする方へ行くアキ

一龍はしばらく待っていると『じいちゃん』とアキが何かを抱い

て帰ってきた

『爺ちゃんこの子供のドラゴン怪我して倒れてた』と悲しそうに言うアキ

「む？これは！早く帰って治療するぞ！」と言って家に帰って治療をおこなう

『爺ちゃんこのドラゴンの子供どないする？』

「ふむこの子供のドラゴンは親が居ないみたいだし怪我を治すついででアキが育ててみたらどうじゃ？」

そうしたらアキが『ホンマに！？大切に育てるわこれから家族になるんやからな。でもこのドラゴンの種族は何やる？』

「それはスターダストドラゴン、別名「星屑龍」というグルメ界に住む絶滅危惧種の伝説のドラゴンじゃ」

『何で伝説なん？』

「そのドラゴンが飛ぶ姿が美しいのと戦った時の強さから伝説と呼ばれたのじゃ」

『ふ〜んそれより名前考えないとな』

「確かにそうじゃなって目が覚めたみたいだぞ」

「きゅく〜」とあくびをする子供ドラゴン

『なあお前俺の家族にならないか？』と聞くアキ

「きゅい」と頷く子供ドラゴン

『じゃあ名前考えないとな〜……そうだ「シルフ」って名前どうだ？風のことをシルフィードって聞いたことあるからそれにちなんでそうつけたんだけど』とたずねるアキ

「きゅいきゅい」と喜ぶ子供ドラゴン

『よし！これからお前の名前は「シルフ」だよろしくなシルフ』

「きゅいきゅい」「良かったのうアキ」

仲良くなったアキとシルフを見ていた一龍がそつつぶやいた。

第2話（後書き）

シルフ出しましたアキと仲良くなってほしいですね。

ところでシルフは大きくなったらどんな鳴き声になるんだろう？
考
えてなかったよ

第3話

おつす、18歳になったアキや、今俺はシルフと一緒にベジタブルスカイへ目指して天から生えたツル？を登ってるそこや何でこんなところに居るかと言つと……

～回想中～

今日の修行が終わってシルフと遊んでいたら爺ちゃんが来て修行の一環としてベジタブルスカイへ行つて来いと言われた。

『ベジタブルスカイ何やそれ？』

「標高数万メートル：雲の上にある天空の野菜畑じゃ独自の野菜が無数に育つまさに野菜天国じゃ」

『へえ～野菜天国が美味しい野菜がありそうやし何よりおもしろそうやんけ！』と興奮気味でいう俺

「あそこへ行くまでには急激な環境変化や気象変化があるから修行にもなるしアキ、お主のグルメ細胞に適合する食材があるかもしれんからな」

『俺に適合する食材が楽しみやな。』

俺達がそんなことを言っていると今まで黙ってたシルフが急に騒ぎ出した。

「きゅい！きゅいきゅい！」

『どうしたんやシルフ、お前自分も行きたいんか？』と聞くと

「きゅい！」と元気にうなずいた

『そうかじゃあ一緒に行こう。最近成長して強くなつたしお前は俺の相棒だからな。』と言つてシルフの頭をなでた。

「きゅいきゅい」とシルフは嬉しそうにしていた。

～回想終了～

『おお～きれいな星空やな～シルフ』

「きゅいきゅい」とアキの頭の上で嬉しそうにするシルフ。

『明日には登り切るから早めに休むで』といって周りの安全を確認して仮眠をとる俺。

そこにシルフが「きゅい」と返事をしてアキといっしょに眠った。

翌朝、猛獣たちに襲われなかったおかげで十分休めたアキ達はツルを登るのを再開する。

途中猛獣たちに襲われるが撃退し進んでいた。
しばらく登り続けると

ぶわっ

『ん？急に寒さむなったな』と考えていたらシルフが何かを伝えようと空に向かって指をさしていた。

「きゅい！きゅい！」

『どうしたんやシルフ？何かあった……の……か』

シルフが指さす方へ目を向けると辺りが急に暗くなってきた。

『オイオイ（汗）と冷や汗をかく俺

「きゅい」と小さく鳴くシルフ

『あれは空の立入禁止区域積乱たちいりきんしくうき雲やないか！』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ ビュオオオオオオ ゴロゴロゴロ ピシ
ヤア

「ゴアアアア」 ビュオオオオオ ズガン ピシャーゴロゴロゴロ

『猛獣たちもこの強風と雷でやられてるな。念の為風の衣纏っとくか』（風の衣、風を自分の周りに纏い防御や体温調節などをする技）
ヒュンヒュンヒュン（よしこれでしばらくわ大丈夫だろ）と思って
いたが

ゴオツといきなり吹く突風

（これはダウンバーストやんけ！）

『マイナス50の冷氣爆弾や！』

（これはたまらんな）

『これから積乱雲に突入するしっかり掴つかんどきやシルフ』と言って
積乱雲に突入する

「きゅい！」といってしがみつくシルフ。

積乱雲の中

『真っ暗で少ししか見えへん』と言って進む俺
ビュオツと強い風が吹く

（寒いなこのままじゃあかん！この環境に適應するんや）

まずは呼吸や普通の呼吸じゃあダメやこの低酸素のなか取り込んだ酸素を逃がさないように二酸化炭素だけを排出する。

（できたまだスムーズには無理やけど十分体が動く）呼吸法を覚え
た俺は先へ進む

『おっ周りが明るくなってきたなもうすぐで頂上やがんばるシルフ』
「きゅく〜」と返事をするシルフ

しばらく進んで行くとライトニングフェニックスが居た

『こいつは！雷雲の中に住むって言われてる伝説の雷鳥ライトニングフェニックスやんけ！確かこいつの肉は全身に電気が走るようにうまいって聞くちょうど腹が減ってきたしこいつを食うか俺のフルコースメニューに入るかもしれない！』と言って食うことを決める俺、そしたらシルフが、「きゅい！きゅい！」と自分もほしいと言わんばかりに鳴く。

『お前も食いたいかシルフ頂上は近いし逃げられても困るから頂上までぶっ飛ばして戦うか』と言って俺は脚に風の力を纏わせる。

『行くぜ！全力全壊や！ぶっ飛ば風神脚！』

ライトニングフェニックスをベジタブルスカイへ蹴り飛ばす。

『一気に駆け上がるぞもたもたしてたら逃げられちまう。』
『ってベジタブルスカイへ駆け上がったっていったシルフも「きゅいきゅい」と食べれるのを楽しみにしていた。』

第3話（後書き）

次回はライトニングフェニックスと戦いその後、野菜たちへ行こう
と思います。

原作トリコの食材説明を見てこれアキ能力的にぴったりじゃね？と
思い入れました

因みにライトニングフェニックスはアキのフルコースのメインに入
れたいと思います。

第4話（前書き）

シルフが戦います

第4話

トウース、アキや今俺とシルフはベジタブルスカイでライトニングフェニックスと絶賛戦闘中や。

「ギユアアアアア」と雄たけびとともに千万ボルトの雷弾を放ってくるライトニングフェニックス。

『シルフ迎撃や！響けシューティングソニック！』と指示を出す俺。「ギユアアアア」とシューティングソニックを放って迎撃するシルフ。

『まさかシルフが本気で戦ったらここまで強いとわな』とシルフの強さに驚いていた。

（回想中）

『よしベジタブルスカイに到着や、さつき吹っ飛ばしたライトニングフェニックスどこいったんや？』

そんなことを考えていると俺の横を雷弾がとっり過ぎて行った。

『危なっ！やっぱりいきなり吹っ飛ばしたの怒ってるんか？』と考えてると

「ギユアアアアア」と怒ったライトニングフェニックスが10万ボルトの電気を纏って突進してきた。

『うおっ！体から電気を放出してるから普通やったら近づくかへんな。けど俺は雷や電気を操れるんや近づくって吹っ飛ばしたるわ！』
と言って近づく俺

そして

『おらめ雷神拳』

ぶん殴った。

「ギユアアアアア」と体から1万ボルトの電気を放出して反撃してきた

『がはっ！やるやんけお返しや！雷鯨弾！』

雷で作った鯨サメを相手に放つ技。放った相手に？み付いたり体当たりしたりする雷のエネルギーが無くなるまで攻撃をする本人の意思で消すこともできる

俺の放った雷鯨弾がライトニングフェニックスに攻撃する。

ドーン ガブツ

「ギユアアアアア！！！」と？み付かれて苦しそうにするのだが体から10万ボルトの電気を放出して打ち消す。

『マジか（汗）あれ結構エネルギー使うねんけど打ち消したわ、お互いに電気または雷を使えるからか知らんけど厄介やな。』と言ってこれからどう戦うか考えていると頭の上に乗ってるシルフが俺に声をかけた。

「きゅいきゅい！」と自分が戦うと言いたいのか俺の前に出た。

『シルフお前戦いたいんやな。』

シルフは「きゅいきゅい」とうなずいた。

俺は『分かった。思う存分戦え敵は強いけどお前なら勝てる行けシルフ戦闘モードになってぶっ倒せ！』と言ったその言葉を聞いてシルフは戦闘モードになってライトニングフェニックスに向かっていった。

（回想終了）

ライトニングフェニックスと互角に戦っていたシルフが疲れが始め
めていた。

『大丈夫か？初めての戦闘でこれだけ戦っていたら疲れが出始めた
な、シルフ少し時間を稼いでくれお前と一緒にあいつを倒そう。』
そう言っつて力を溜め始める。

「キュアアアア」分かったと返事をするようにライトニングフェ
ニックスの足止めをするシルフ

ライトニングフェニックスは俺に何かさせないように攻撃しようと
するが全てシルフが迎撃している。

そして、『待たせたなシルフ』といって力を溜め終わった俺がライ
トニングフェニックスの前に立つ。

シルフは待ってましたというように鳴く。

『さてそろそろ俺たちも疲れたから終わりにするで！』と言って相
手に突っ込む。

「ギユアアアア」とライトニングフェニックスは千万ボルトの
雷弾を放つ。

放たれた雷弾はシルフが迎撃し俺が懐に入り全力で技をぶつける

『ナイスやシルフ！うおおおお 修羅電撃旋風拳！！』俺はライ
トニングフェニックスの体を貫いて仕留めた。

体を貫かれてライトニングフェニックスは叫びながら倒れた。

『おっしゃー！勝った〜！』ガッツポーズする俺

「きゅいきゅい」とチビ龍になって喜ぶシルフ

『よしまずはライトニングフェニックスの体毛をはがすぞ、この体
毛は後で売ったりするからな。その後は焼いて食つぞこの野菜達
はその後や』と言っつて火をおこす

そして……

『よし食うかシルフ』

「きゅいきゅい」

『それじゃあ、この世のすべての食材に感謝を込めて……いただきま
す。』

「きゅいきゅい」

そう言っただけでライトニングフェニックスの肉にかぶりつく。

ガブツもぐもぐもぐ

『！？うっめえええええ食べた瞬間全身に電気が走って俺の体が
スパークしてるわ』自分の体を見ようと全身が電気を纏ってバチ
バチッといっていた。

「きゅいきゅいきゅい」とシルフも美味しかったみたいでさらにか
ぶりついている。

『それに、この食材は俺のグルメ細胞に適合して細胞の壁をぶち破
った、これは決まりやな』と言うと

「きゅい？」何が決まったの？とシルフが聞いてきた

俺はシルフに答える

『ああライトニングフェニックスは俺の人生のフルコース、そのメ
インディッシュに決めたんやどうやシルフ？』と聞くシルフは「き
ゅいきゅい」賛成してくれた見たいや。

『よし！フルコースのメインディッシュ決定を祝ってジャンジャン
食うぞシルフ』と言ってライトニングフェニックスの肉にかぶりつ
く。

シルフも肉にかぶりつき俺のフルコースの一つが決まったのを祝福
してくれた。

ライトニングフェニックスを食べ終わった後、満腹になって星空を
見ながらシルフと一緒に寝た。

第4話（後書き）

アキのフルコースのメインディッシュ決定しました。

次回やっとベジタブルスカイの野菜たちが出ます。オゾン草もだしますのを見て下さい。

第5話（前書き）

アキに料理スキル付けようか考えています。
後、技の方も募集中です。

第5話

どもっ！アキっす昨日の晩ライトニングフェニックスと戦ってポロポロやったのに朝起きたら治ってるんですよさすが万能な細胞グルメ細胞。

で今俺たちはベジタブルスカイの野菜を食べたり見つけたりしています。

『おお見渡す限り野菜のジュータンや!!』
「きゅいきゅい」

『そうかお前も食いたいかシルフ早速試食開始や』
そう言つて俺たちは食べ歩きを開始した。

『大根か一ついただくわ』
俺は泥を落としてから口の中へ入れた

カプ シャクシャク

『！美味いこんな瑞々しい大根はじめてや』
「きゅい」シルフはキュウリを食べていた

『次いくで〜』
「きゅい」

『これはブロッコツリーか中からドレッシングが染み出てきて美味いな』

「きゅい」

『こんどはポテトの泉やんけ全部フライドポテトで塩味がきいて絶品やな』

その後いろいろな野菜を食べ歩いたアキ達満足して帰ろうとした時「きゅいきゅい」とシルフが何かを見つけたようだ。

『あれはオゾン草かいくつか爺ちゃんのお土産にしたる行くでシルフ』

そう言っオゾン草の元へ行く。

『おっ葉が開いてるラッキー普段は開いてないらしいのに』と言っていくつかオゾン草を収穫してベジタブルスカイを後にした。

第5話（後書き）

オゾン草は食材に好かれていたら開いてるみたいなので収穫しました。

アキのフルコースには入れません。
ベジタブルスカイ編ほとんどトリコの原作見て貰いました

第6話

ハロ、アキヤ。

ベジタブルスカイから帰ってきた俺たちは爺ちゃんにお土産としてオゾン草を渡した。

「ほう、オゾン草をとってきたのかあれは警戒心が強くて人が来ると葉をとじるのだからなあ。」

不思議そうに言う爺ちゃん

『俺たちが行った時、葉は開いてたで？それよりもそのオゾン草どうやって食べるんやーっ食べてみたら腐ったで？』

「それはのう2箇所同時に食べるんじゃ」

『2箇所同時？めんどくさい食材やな二人おらな無理やんけ。』

「二人いる必要は無いぞ見とれ」

カリユ カリユ

「と、この様にオゾン草も気がつかない程のスピードでほぼ同時に2回かじればいいのじゃ。」

『そんな早くかじるの普通無理やって。それより聞いてくれ爺ちゃんの言った通り俺のグルメ細胞に合う食材があつてん。で、その食材を俺のフルコースのメインディッシュに決めてん。』

「メインに？それはどんな食材じゃ？」

『それはなあ……ライトニングフェニックスや！一口食べれば全身に電気が走って細胞の一つ一つが活性化してスパークが起きるんや。』

『「いい食材を見つけたのう」』

とほめてくれる爺ちゃん。

『ところで爺ちゃん俺、刀と包丁がほしい。』

「刀と包丁？なぜほしいのじゃ？」

『刀の方はライトニングフェニックスと戦ってた時思ってた。自分の能力と相性が悪い奴がこれからも出てくるかもしれないって、それやったら武器を持つてて状況に合わせて使った方がいいなって。刀なのは単純に好きやからや。』

「包丁の方は？」

『捕獲した食材今回はライトニングフェニックスやなそれを調理する時でかすぎて美味く焼かれへんやろ？それやったら自分の食べやすいサイズに切つて焼いた方が好きな火加減で焼けるし調理がしやすいな』と思つて』と考えていたことを言う俺。

爺ちゃんはずこし考えてこういつた。

「わかつた刀と包丁は研ぎ師メルクに依頼しよう紹介状を書くからまತ್ತれ。」と言つて紹介状を書きだした。

しばらくすると……

「できたこれが紹介状じゃこれをメルクに渡せば作ってくれるぞ」

『ありがと爺ちゃんこれからメルクの居る場所に行つてくるわ。行くでシルフ』

「きゅー！」

シルフを連れてメルクのいるメルクマウンテンへと向かつた

第7話

どうも、アキヤ。

今俺はメルクに刀と包丁を作ってもらったためにメルクが居るっていうメルクマウンテンに来てる。

『ここがメルクマウンテンかでかい階段やな登るのめんどいから飛んでいくか、なっシルフ？』

「きゅい！」

フワッ

俺は風力（飛翔術）を使って空を飛んで進んでいった。
しばらく飛んでいると頂上についた。

『ここにメルクが居るんか。おお〜いメルクおるか〜』

返事はないがでかいオッサンが出てきた

『あんたがメルクか？』

「……」 「ここによここによここよ

（小せえ声）（汗）

『俺はアキヤ爺ちゃんを紹介でここに来たよろしくこれが紹介状や』
と自己紹介をして紹介状を渡したが考えていることは（これはあれやな唇の動きで何言ってるか判断せなあかん）と考えていた。

えつとなになに…… 「わかった刀と包丁は作ってやるただ研ぐための石、メルクの星屑は自分で取ってこい修行になるからと龍さんの手紙に書いている」

『分かったそれ取ってきたら作ってくれるんやろ』
「ああ最高の刀と包丁を打ってやる」
と言ってくれた

場所が変わってヘビーホール

『ここがヘビーホールか下へ行けば行くほど重力が強くなって動き
ずらくなるんやなシルフ、警戒だけはしときや』
「きゅー！」

その後1万メートル位下りて……

『だいぶ下りたな、それにしても体が重い。この重力に慣れてい
かないとあかんな。』

周りの壁の穴からバルバモスガ出てきた

『こりやあまたわんさか出てきて』

「ガルツ」

『そら来た？み付いてきたので避けたのだが

ブシュウ 血が出た

バカな…俺はちゃんと避けてんけどなあ

『そうか！重力が強い分体の反応がいつもより遅れているんか…！』
まずいな反応が遅れてる分いつもより速く動かなあかん、いつもよ
り一呼吸前倒しに敵の動きを瞬時に予測して…回避する！

回避しているとこれならどうだと言わんばかりに大量の数で囲み攻
撃してくる。

『これはさすがに回避は無理やなら防御するまでや！羅風障壁！』
自分の周りに竜巻を発生させて相手からの攻撃を防御し弾き飛ばす

俺は自分の周りに竜巻を発生させて相手の攻撃からの攻撃を防いだ。

『これぐらいの敵の攻撃位なら防げるか。さてこの重力に慣れてきたな、そろそろ次のステージへ進むかさらなる重力の世界へそして…メルクの星屑のある場所へ。落雷踵落とし！』

ガラガラと俺は足場を壊してさらに下へと進んでいった。

採掘場付近

『重力がさらに増して体が重いつて言うかだるいな、けどこの強力な重力に対応する動きやつと分かってきたで』

重力に逆らわず倒れるように身をまかせまるで球体たまのように…転がるように移動する…回転することにより負荷を流動させ筋肉や骨への負担を分散させる。

『この重力のせいで体が疲れてきて体力が無くなってきたそろそろ何か食べて体力回復せなあかん』

『きゅいきゅい！』

『どうしたシルフ、ええ食材見つけたのか』

『きゅい！』

『あれはルビークラブ高級食材の蟹かにやんけ！その強さよりも見つけにくさから高い捕獲レベルを誇り、ルビーの殻で覆われたその身は滅多に市場に出ない珍味。シルフ捕まえてきてくれ俺は疲れて動かれへん。』

『きゅい！』

戦闘モードになって捕まえてきた。

〜ルビークラブ実食中〜

がぶう もぐもぐ

『美味え〜ルビークラブ絶品やな』

「きゅいきゅい」

ルビークラブを食べ終わってメルクの星屑を探し出す俺たち

『さてルビークラブ食って体力回復したからこの重力にはもう慣れた。ここどこかにあるメルクの星屑を見つけてさっさと帰ろ』

しばらく探しているとメルクの星屑の採掘場を見つけた

『これがメルクの星屑かこれをいくつか貰って…と、よし貰うもん貰ったし帰るでシルフ』

「きゅい」

俺はメルクの星屑をいくつか貰ってシルフを頭に乘せて飛翔術を使ってメルクのいるところへ帰って行った。

第7話（後書き）

メルクの星屑ゲット。

この後刀と包丁を作ってもらいます。

刀と包丁を作ってもらった後どうしよ……

第8話（前書き）

メルクのセリフは唇を読んでいることとして普通に書きます

第8話

メルクの星屑を持って帰ってきた俺達は早速メルクに刀と包丁の製作をお願いした。

「メルクの星屑取ってきたでこれで刀と包丁作ってくれるな？」

「ああ約束どおり刀と包丁は作ってやる出来るまでには時間がかかるがその間どうする」

「出来るまではメルク…あんたの元で刃物の研ぎ方教わるわ。自分の武器や包丁の手入れは自分でやらな作った人や作ってもらった物に対して失礼やからな。」

「分かった明日から刀を作る今日はもう休め疲れただろう」

「お言葉に甘えて休ましてもらおう行こかシルフ」

「きゅい」

俺達はメルク言葉に従って休ませてもらった。

翌朝

（作業場）

そこでメルクは刀の材料になる物を見せてくれた

「これはマグマの中に住む竜「マグマドラゴン」の牙の一部だその牙は強度が高くマグマの中に住んでいただけあって数千度で熱しても変形しないからハンマーで叩いて形を成形する「鍛造」という作業がでんメルクの星屑で削っていくしかない。」

『それほどの素材で刀を作ってくれるんか……ありがとうなメルク』
「では早速作業に入ろうか」

『おう』

それから数日の間メルクに教えられながらひたすらマグマドラゴンの牙を研ぎ続けた

そして

「出来たぞとてもいい出来だ」

『これはきれいな刃やな緋色や』

「ああ研いだマグマドラゴンの牙に刀の材料となる玉鋼を接合して作ってみたらこんな風になったのじゃどうじゃ良い刀じゃろ。」

『ああこんなにきれいな刀みたことがない』

「嬉しいことを言うのう。次は包丁の方じゃが刀を作るときに一緒に作ったのじゃこれも切れ味がいいから気をつけて使うのじゃぞ」

『ありがとうメルクこの刀の銘はあるんか？』

「いやまだ付けてないお主が付けてくれんかその方がその刀も喜ぶだろう」

『そうか……ならこれからこの刀の銘は「緋竜」や！』

「緋竜が良い銘じゃ。それでこれからどうするのじゃ？」

『今からヘビーホールに行ってこの刀の切れ味を試しに行ってくるシルフは休ませといてくれ』

そう言ってヘビーホールへ向かっていった。

くヘビーホールく

『かかってこい猛獣どもこの「緋竜」でぶった切る！』
そう言って猛獣たちを挑発して怒らせる。

「ガルルア」猛獣の一匹が？み付いてきた

『居合一閃！』

居合切りをして猛獣の一匹の腕を切り飛ばした

『すげえ切れ味やな。けどまだまだ行くで雷神剣』

雷を刀に纏わせ敵を切り伏せる。

『安心しいや食べる時と身を守る時以外俺は殺しはせえへん今回は
緋竜の試し切りに来ただけやからな』

そう言つてメルクマウンテンに戻った

『戻ってきたで』

「どうじゃった刀の切れ味は」

『ああ最高や猛獣の腕が軽く切り飛ばせた』

「そうかそれは良かった」

『刀の試し切りも終わったしそろそろ帰るわメルク。刀と包丁大切に
に使わせてもらう』

「さよならじゃなアキ、メルクの星屑は緋竜と包丁を研ぐのに持っ
ていくがよい」

『サンキューじゃあ帰るぞシルフ』

「きゅい」

メルクに挨拶をしてメルクマウンテンを後にした

第8話（後書き）

刀と包丁ゲット刀の銘は緋竜に決定。

刀を使う特訓やらしてなかった……まあいいかご都合主義というところで

第9話

メルクマウンテンから帰ってきた俺は刀ができたことを伝えるために爺ちゃんが居る部屋に行った。

コンコン

『爺ちゃん俺や刀ができたから帰ってきたぞ』

ガチャ

「おおアキかちょうど良い所に来たお主に客が来てるんじゃ」

『俺に客？俺に知り合いはあんまり（前世も含めて）おらんで？』

「まあとにかく会ってみなさいなかなかの美女じゃったぞ。」

『会っただけ会ってみるか知ってるやつかも知らんし。』

（待ち室）
待合室

『ここに俺の客が居るんやな。』

「そうじゃ。おゝい連れてきたぞ。」

「ありがとうございます。あなたがアキさんと合ってる？」

『合ってるで。それよりあんた誰や俺にあんたみたいなかawaii子の知り合いおらんで？』

そう見た目が ブラックキャット black cat に出てくる「セフィリア」アークス
(額にマーク無し)なんて知り合いに居るわけない。
そんなことを考えているとその子が近ずいてきて抱きつき「会いたかったよ兄さん」と言ってきた。

『もしかしてお前「桜」か？』

「うん！久しぶり会いたかったよ兄さんそれとこの世界ではサクラっていつてね」

『分かった。でサクラなんでこの世界に居るんや？』

「それは……神様に能力を貰って兄さんの居る世界へ漂流転生させてもらったの」

『漂流転生？』

「赤ちゃんからの転生じゃなくて初めから肉体を貰ってその世界に転生する事をいうの」

『へえ〜』

桜とそんなことを話していると爺ちゃんが

「お主らワシを忘れとらんか？」と言ってきた。

『げつ爺ちゃんさっきの話どこから聞いてた？』

「一緒に部屋に来たんだから初めから聞いてるに決まってるじゃろ。それよりさっきの話詳しく説明させてもらっぞお主ら。」

（説明中）

『「……と言っわけや（です）」』

「なるほどのう、何でそのことを黙ってたのじゃアキ？」

『それは……この世界は俺にとってすでに現実なんや、前の世界のこと気がならんって言ったらウソになるけど俺は、この世界で生まれて爺ちゃんに拾われて育ったアキと言う人間や。それに前の世界には帰られへん、それやったらこの世界で前の世界の分まで楽しめるばいいそう思ってん。』

「そうかなら言うことはない。ところでお主ら兄妹じゃろ？何で喋り方が違うのじゃ？」

「それは親が再婚して家族になったから喋り方が違うんです」

『つまり義兄妹ってやつやな』

「なるほどのそれではサクラと言ったかお主ワシの孫にならぬか？」

「どづいつ意味ですか？」

「簡単じゃワシの孫になってアキと一緒に過ごすのじゃ」

「ですが……」

「アキの嫁になってもいいぞ義理の兄弟だしの」

「！？なります孫になります。そして嫁に！」

『あははこれからは一緒やよろしくな。ボソッ（嫁としてもな）』

「／／／／／／」

こうして俺たち兄妹は家族になった。

第9話（後書き）

妹出しました。

なぜサクラがこの世界に来たのかはアキに惚れていてアキが死んだあと神様に願ったからです。そしてアキがトリコの世界で18歳以上になったら出会えるようにしてもらったからです。

神のいる場所は時間の設定が自由なので実際の待ち時間は数分くらいです。

設定 2

サクラ

性別 女

年齢 17歳

身長 165?

体重 黒く塗りつぶされて見えない

容姿 ブラックキャット BLACKCATに出てくるセフィリアアークス(額にナンバーのマークは無し)スタイルはボンツ キュツ ボンツの美人

好きな人 アキ、一龍(家族として)

好きな事 アキと一緒に過ごす、アキに頭をなでてもらう

服装 アキと同じ

能力 不老不死の身体(身体の成長は止まっている)、グルメ細胞、限界突破、世界を渡る力(アキのいる世界に行く又は一緒に付いて行くことしかできない)

武器 刀(神にもらった)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5199x/>

トリコ～おいしい食材を求めて～

2011年10月26日11時48分発行